

北医療薬会報

発行所 北海道石狩郡当別町金沢1757番地
北海道医療大学薬学部同窓会

☎(0133)23-0301 直通・FAX
☎(0133)23-1211 大学代表
発行人 田中稔泰

印刷所 (株)正文舎

札幌市白石区菊水2条1丁目4-27
☎(011)811-7151



2017 YOSAKOIソーラン祭り『THE☆北海道医療大学』



目 次

巻頭挨拶 同窓会会長 田中 稔泰	3
第37回 北医療薬 総会および医療薬学セミナーについて	4
定年退職される先生をご紹介します	4
定年退職される先生からのメッセージ	
小田 和明 教授 創薬化学講座（薬化学）	4
島村 佳一 教授 薬理学講座（臨床薬理毒理学）	5
新任教授からのご挨拶	
柴山 良彦 教授 薬剤学講座（製剤学）	7
支部だより 栃木支部	8
卒業生からの近況報告	
第37期 薬理学講座（薬理学） 遠藤 朋子 さん	8
在学生からのメッセージ 薬学部 5年 武田 芙蓉 さん	9
第64回 北海道薬学大会で本学同窓生2名が同時受賞	10
日本薬学会北海道支部第144回例会 医療薬学貢献賞並びに日本薬学会北海道支部奨励賞	
2017年度オープンキャンパスのご案内	11
第9期生卒業30周年記念祝賀会 金田 祥子 さん、高木 百江 さん	12
第1回 薬学部同窓会「卒業生・在校生合同懇談会」の報告	12
北海道医療大学 同窓会☆コラボ講演会 第10弾について	13
お知らせ（第38回 北医療薬 総会および懇親会のご案内）	14
編集後記	14

巻頭挨拶

「これからの大学と同窓会に想う」

北海道医療大学薬学部同窓会会長

田中稔泰



1974年、知育、徳育、体育の三位一体を教育理念として創立された東日本学園大学、現北海道医療大学は今年で43年目を迎える。薬学部の単科大学としてスタートした大学なので、まさに薬学部の歴史であり、3期生の私にとって感慨深いものがある。また今年第40期という節目の卒業生を世に送り出した年でもあり、5,300名を超える卒業生が全国各地で活躍していることになる。大学の歴史をみても医療系総合大学として発展させるべく学部を構築させ、現在では薬学部、歯学部、看護福祉学部、心理科学部、リハビリテーション科学部、歯科衛生士専門学校5学部8学科1専門学校にまで発展してきた。また、キャンパスも当別の緑豊かな丘陵を背景とした校舎を発展させ、あいの里キャンパス、札幌駅前のサテライトキャンパスで教育を行っている。私は同窓会長として、また後援会役員として、例年入学式、卒業式に出席しているが、かつて単科大学として始まった我が大学の入学式、卒業式は160名足らずであったが、今では学生も増え、当別キャンパスで両式典を行うことができず、札幌市内のコンベンションセンターという大型国際会議場を貸し切られて行われている。

本学の教育は冒頭の基本理念を基に教育目標を「新医療人の北の拠点」として地域医療へ貢献する専門職業人を育成することを社会使命とし行っている。また超高齢化社会を迎え、厚生労働省が在宅医療介護へのシフトを推進する状況に対応して

2015年には「地域包括ケアセンター」を開設するなど特色ある教育に努めている。しかし、少子化による18歳人口の減少から地方私立大学をめぐる学生確保は非常に厳しい状況にあり、特に北海道のような地方私立大学においては顕著である。このことは、来年から始まる2018年問題として話題になっているが、おそらく淘汰される大学も出てくるのではないかとされており、大変厳しい状況下にある。大学の評価の一つとして重要なのは国家試験の合格率であるが、本学薬学部は常に東北以北において上位にあり、全国的にも評価は劣らない結果を出し続けている。これは先生方のきめ細やかな教育の成果だと思うが、国家試験とは別の角度から、我々同窓会としても在学生や、卒業生に何ができるのか、真剣に考え行動していかなければならない時代へと入ってきたと認識している。現在、卒業生への薬学セミナーも同窓会の担当者より計画的に開催され、評価を得ているところである。また、今年から学生への就職説明会後、同窓生と在学生との懇談会も初めて開催し一定の成果が出たものと認識しており、次年度以降も改善しながら継続していきたいと考えている。また卒業生へのアンケートを通して大学教育の方向性の一助となることができないか検討しているところである。今後、アンケート等が皆様方のところに送られてきた際には、是非この点をご理解頂き、ご協力をお願いしたい。

第37回 北医療薬 総会および医療薬学セミナーについて

平成28年7月9日(土)に北医療薬 総会および医療薬学セミナーが開催されました。医療薬学セミナーには講師として本学客員教授 株式会社 クリオネ 顧問 唯野 貢司先生を迎え、「薬剤師に求められる生涯学習と地域活動」と題し、薬剤師の生涯にわたる日々の研鑽の重要性と薬学と地域社会との



関わりの必要性についてご講演を頂きました。その後、活発な質疑応答も行われました。

講演終了後には懇親会が開催され、唯野先生にもご参加頂き、今後の薬学教育および薬剤師のあるべき姿、同窓生の近況や活躍の話題など、活発な意見交換が行われ、大盛況の会となりました。



定年退職される先生をご紹介します

平成29年3月をもちまして、小田 和明 教授 創薬化学講座(薬化学)、島村 佳一 教授 薬理学講座(臨床薬理毒理学)が定年退職されました。平成29年3月2日に先生方による最終講義が行われ、その後中央講義棟10階ラウンジにて退職記念祝賀会が行われました。北海道医療大学の薬学教育への多大なご貢献に心より感謝致します。



定年退職される先生からのメッセージ

「家、家にあらず、継ぐを以て家とす」

本学での勤務年数42年間という
と私の人生の2/3以上になります。
今年には40期生が卒業ですが、
学生は1期生ですと兄弟(4歳違
い)、現在の1年生ですともう少
しで孫の世代となります。このように考えると気の
遠くなる時間の流れですが、今考えると本当に短く
さえ感じます。ちょっと感傷に浸りながら来し方を



創薬化学講座(薬化学) 小 田 和 明 教授
振り返ってみます。

音別からの1期生を迎える為に出来立ての当別校舎に入ったのは昭和50年の夏。2年生の最初の実験が我々の担当でしたので実習書の原稿作成、印刷依頼と慣れない仕事に不安と期待のないまぜな気持ちだったのを覚えています。最初は大学時代と同じ札幌の下宿で生活していましたが、やがて通うのが面倒くさくなり、住まいも当別に移しました。初任給

7万円余り、アパートは新築2LDK 35,000円、今から考えると全く後先を考えない選択でした。文字通り、どっぷり「当別漬け」の毎日、そのアパートが間もなく学生の予約不要の宴会場になるのは目に見えていました・・・。そんな生活は、今では教員として倫理的に問題となるのは明らかですが、その時出来た学生との濃密な人間関係が、期せずして今の自分の大きな財産になる等とはゆめゆめ考えもしませんでした・・・自分にとってもただただ楽しい時間でした。やがて結婚して子供が出来、住いは移りましたが、当別での生活も今では40年を超えました。

新設大学でしたから、教員は皆若く、私と教授（町田先生）との年齢差は僅か13歳、長い長い助手時代（23年）が続きました。学位（昭和59年）も取りましたが、このままで良いのか・・・等と先の見えない生活にかなり鬱屈した時代もありました。ただ、家族を連れての米国での留学生活や、大学内のライバルに恵まれ研究的な面で見ると充実していましたし、田舎の私立大学にしてはそこそこの研究の実績は挙げたのではとちょっと自己満足はしています。45歳でやっと助教授、嬉しいというよりホッとした気持ちと、父母を始め家族にもかろうじて面目を保てたのではとの思いでした。

平成16年教授へ・・・不安いっぱい船出でした。テーマもより早く医薬品としての可能性を問うべく「CYPを阻害して薬効を示す薬物の創製」へと大きく変えました。幸いにして、西園先生、山口先生のおかげで大学院生も基礎系の教室としては数多く来てくれるようになり、研究も比較的順調に進めることが出来ました。

42年間、幸せだったことは、教員としての自覚も

才能も持ち合わせていない私を多くの方に育てて頂いたことでした。助手時代は父親より年上世代の優れた先生方に教育者、研究者としての姿勢を教えて頂きました。また同じ世代の研究者と切磋琢磨して研究成果を競ったことも忘れられないことです。しかしやはり私にとって一番の幸せと大きな財産は前述した1期生から数えて5,000余名の卒業生との絆です。

教授になり当然のように国家試験対策で頭を悩ますこととなります。本学の対策は一朝一夕に出来上がった物では有りません。学生と力を併せて文字通り試行錯誤の連続から、「学生に寄り添った教育」が時間をかけて育まれてきました。手前味噌ではありますが、我々の先輩教員は、ベストに近い指導体系を作り上げてくれたと考えています。この黎明期が本学の第一世代だとすると、その方々の薫陶を受けた我々は第二世代ということになります。40年余を経て今薬学部の教員の過半数は本学出身者となりました。このような第三世代の方々には、時間をかけて育まれた本学の良い部分は継続し、新たな改革は躊躇無く成し遂げて頂きたいし、必ずそうなると信じています。

私の最終講義の表題「家、家にあらず、継ぐを以て家とす」は能楽を完成させた世阿弥の風姿花伝いわゆる「花伝書」の言葉です。家は今充実していれば家と呼ばれるに値するのでは無く、そこで生まれた知恵、伝統を確実に次の世代に引き継いでこそ初めて本当の家が出来上がるという考え方です。私も前任者から受け継いだ大切な家を、次の世代に引き継ぐ時が来たということです。長い間大変お世話になりました。

「同窓会の先生方から教えていただいたこと」

薬理学講座（臨床薬理毒理学） 島 村 佳 一 教授

北海道医療大学薬学部での約17年間の教員生活を振り返ってみて、地区別父母懇談会は大変楽しい思い出です。学生のご父兄の生の声や、同窓会支部で活躍されている同窓会役員の先生のお話を直接伺い、教員と



しての自覚・責任感を新たにしました。赴任して間もない頃に参加させていただいた懇談会で、ある役員の先生に「薬学は進歩が速いですから大変ですね」と話しかけられて、「速い進歩についていくには、どの本を読めばよいですか？」と聞き返してしまいました。大変恥ずかしいことですが、私はその時、

臨床現場の治療が教科書とどのくらい違うのか知らなかったのです。これでは国家試験にさえ追いつけません。たとえば、6年制の薬学部では主要事項を4年生までに教えなければならないのですが、3年生で講義した最新知見は、薬剤師国家試験を受験する3年後には常識になっているからです。最新情報を盛り込んで講義することが要求されていると気がつきました。そういえば、医学部卒業時に、ある先生から戴いたアドバイスは「もう今までのような講義はありません。どんどん進歩するから、これからは何か一つでも雑誌を定期購読して自分で勉強するように」でした。私は長らく臨床の最新情報から遠ざかっていたので、早速2、3の臨床医学雑誌の定期購読を開始して、医学・薬学の進歩からの遅れを取り戻す努力を継続しました。そして学生用には、なるべく頻繁に改訂される本を教科書に選定しました。本物の病気に立ち向かっている患者の治療に、医師と薬剤師の区別はありません。薬剤師は医師のパートナーです。教科書的古い知識の受け売りではなく、これからの進歩を見据えた最先端の概念を伝えてこそ、学生が感動し自分で学びたいと感じるはずです。

定年退職いたしましたでしたが、4月からは非常勤講師として大学にお邪魔しています。会議がなくなり、講義コマ数も少なくなりましたので、以前よりも講義の準備に集中できるようになりました。在任中、私の授業の学生評価アンケートは芳しくありませんでした。今後は量よりも質で、改善した講義を提供して、大切なことを教えてくださった同窓会の先生へ恩返しできればと思っております。

いろいろなことがありました。入学当初、学生は薬剤師になる希望に燃えていたはず、学費を工面している父兄も薬剤師になれるものと信じています。それなのに、モラトリアムというのでしょうか、薬学部4年次まで進級した時点でも、薬学を選んだことに迷いのある学生がいます。受験する大学や学部の進路を選ぶのに、学生が自分の適性を考慮する余裕がないのは仕方がありません。確かに薬学部で学ぶ範囲は驚くほど広範囲ですが、医薬品は生活に密着していますので、薬学は身近な学問と言えます。迷っている学生にいち早く薬学の意義に目覚めても

らい、在学期間という限られた時間内に授業料に見合った以上の付加価値を付けなければいけません。若い学生個人には多様の可能性があります。努力するチャンスが与えられれば人は成長します。一人でも多くの医療大薬学生が希望した目標を達成できることを願っています。そのためには、教員は学生の学力に妥協してはいけません。学生の学力の可能性をもう少し引き出すために、「もう少し、ここまで登ってみてよ」とチャンスと、目標値の提示と、励ましが必要です。

最近、入学生の学力が徐々に低下してきました。ゆとり教育は終わっても、少子化のためか勉強をしたことのない学生も入学してきます。この状況で、教員は涙ぐましい努力を強いられています。学生の学力を国家試験レベル以上に引き上げることが大学の使命ですから、「学生に合わせた教育方法」は正しいですが、「学生のレベルに合わせた教育目標設定」は間違っています。国家試験に合格するために、国家試験レベル以上の内容の授業を受けているのですから、学生が講義を「難しい」と感じるのは当然です。授業の評価で「講義が難しすぎる」と学生が評価するのは正当です。しかし学生は到達しなければならない本当の目標レベルを知らないのです。「難しすぎる講義」という学生の言葉を鵜呑みにすると、入学時の学力低下程度に従って大学の教育目標レベルが低下します。しかも薬剤師国家試験は65%以上が合格なのに、学則では定期試験・再試験は60%以上を合格としています。近年の薬剤師国家試験の傾向は、平易な内容で相対評価ですから、「60%得点できれば実力は十分」という学則を信じると薬剤師国家試験の合格率が低下します。もっと高い理想を掲げる必要があるでしょう。ヒトはやや過大な要求に対して努力するからこそ成長します。同窓会の先生方は大学で鍛えられて薬剤師国家試験合格を達成されたはず。様々な困難を乗り越えられた同窓会の先生方が、今後、ますますご活躍されることを期待しております。

最後に、将来ある皆様にあふさわしい言葉として、昭和時代に灰田勝彦が唄った佐伯孝夫氏の「新雪」と、加山雄三が唄った岩谷時子氏の「旅人よ」の歌詞を捧げます。

新任教授からのご挨拶

「教授就任にあたって」

平成28年4月1日付にて辞令を頂き、薬学部薬剤学講座（製剤学）教授に、関川彬教授、平野剛教授の後任として着任いたしました。薬学部同窓会の先生方に新任のご挨拶を申し上げます。



私は平成5年に九州大学薬学部を卒業後、同大学院修士課程に進学し、放射性薬品化学の研究を行いました。修士課程修了後、鹿児島大学病院薬剤部に採用され、15年間、病院薬剤師として勤務しました。大学病院に在籍中はがん薬物療法に関する臨床および基礎研究を、主に薬物トランスポーターに関する薬物動態学や、マイクロRNAに関する分子生物学研究を薬剤師業務の傍ら行っていました。その間、鹿児島大学大学院医学研究科にて臨床薬剤学（山田勝士教授、現長崎国際大学教授）の指導の下、博士（医学）の学位を取得いたしました。平成22年にご縁を頂き、北海道大学薬学部 臨床薬学教育研究センターに准教授として採用され、臨床薬学に関する教育・研究を、井関健教授、菅原満教授のご指導の下、進めてきました。

90年代の病院薬剤部では、職員数は少なく、院内処方主流で患者さんを3時間待たせることはざらにあり、毎日のようにお叱りを受けていたものです。薬剤師が患者に薬の効能や副作用の説明をすることはなく、薬を取り揃えて、早く渡すことが重要でした。ソリブジンの薬害が契機となり、1997年の薬剤師法改正では文書による情報提供が義務化されまし

薬剤学講座（製剤学） 柴山良彦教授

た。薬剤師に対する社会や医療職からの信頼は薄く、ある地域の医師会からは薬の説明は薬剤師にしてほしくないと、混乱が生じた地域もあったと記憶しております。先人の努力により、現在では薬剤師が薬の説明をしない、ということは逆にあってはならないことになりましたが、病棟業務や専門薬剤師制度など、わずか20年ほどの間に必要とされる資質が、完全に逆転してしまったことに驚きを覚えます。

おととしの薬剤師法改正では、情報の提供に加えて薬学的知見に基づく指導義務が追加されました。これまで薬物療法の指導義務に関する過失は医師がすべて責任を負っていたものを、医師と薬剤師が共同責任を負うという、大きな改正です。またかかりつけ薬剤師制度の開始により、改めて生涯学習に注目が高まっています。薬物療法の重責を担う先生方には、生涯学習に本学を活用いただき、気軽にお問い合わせいただければ幸いです。また薬剤師が解決すべき課題は現場にありますので、同門の先生方には共同研究などを通して、薬剤師の職能発展の一助となれることを願っております。

高齢者の増加による医療需要の急増や、先進医療への対応は薬剤師の今後の重要な職責です。私共としては教育・研究を通して社会に必要とされる責任を果たしていきますので、同門の先生方には今後ともますますのご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。最後に同窓会の益々の発展と、会員の先生方のご健勝を祈念してご挨拶とさせていただきます。

支部だより (栃木支部)

薬学部同窓会 栃木支部 支部長 橋本秀雄さん

【栃木支部の歩み】

栃木支部は平成6年に支部として承認されました。関東地区では古い方だと思います。しかし、支部として承認される以前から1期生の川北恵一先生が昭和57年か58年頃から卒業生に声をかけて有志数名で年1回、新年会をはじめたのが発端でした。その後ゴルフコンペや女性・家族での参加が出来るようにボーリング大会なども開催するようになりました。

そのような活動が認められ、平成6年に支部として承認され、医療薬学セミナーの開催に至りました。記念すべき第1回の医療薬学セミナー講師として栃木県出身の薬品製造学教室（現 薬化学教室）町田教授にお越し頂いての講演でした。それを皮切りにその後少し間隔が空きましたが、平成15年に南教授、平成16年：遠藤教授、平成17年：小田教授、平成18年：栃木、茨城、神奈川合同セミナー、平成19年：黒澤教授、平成20年：高田名誉教授、平成22年：浜上准教授、平成23年：石倉教授、平成24年：和田教授、平成25年：八木教授、平成26年：平藤教授、平成28年：村井教授に栃木県宇都宮市までお越し頂き医療薬学セミナーを行い、懇親会では学生時代の話や先生方から大学の近況報告等をお聞かせ頂き交流を深めてきました。

現在、約50名ほどの卒業生がいますが、今や薬科

大学が増えて栃木県から北海道の大学まで進学する学生が減っているのが現状です。今後の活動に対して不安はありますが、支部の活動を維持し、そして出来れば発展させられるよう努力していきたいと考えています。

【直近の活動報告】

平成28年11月12日（土）栃木県宇都宮市にて北海道医療大学薬学部医療薬学セミナーと懇親会を行いましたのでご報告致します。講師として、村井毅教授にお越し頂いて『LC-タンデム質量分析法を用いた薬物分析』で講演をおこなって頂きました。セミナーには18名の参加がありその後の懇親会では、教授の研究室の卒業生と学生時代の話や現在の大学の現状、今後の薬剤師の立場などの話で盛り上がっていました。



卒業生からの近況報告

第37期 薬理学講座（薬理学）遠藤朋子さん

私は現在、北海道医療大学大学院薬学研究科・博士課程に在籍し、薬理学講座で平藤雅彦教授からご指導をいただいています。2015年8月よりカナダ・アルバータ州エドモントンにあるアルバータ大学薬学部Dr. Seubert研究室に留学しています。

学部生時代から研究に興味があり、2年次に放射薬品化学研究室、3年次に薬理学研究室で薬学基礎

研究を履修し、4年次の講座配属では希望していた薬理学講座に配属されました。5年次には薬局・病院で充実した長期実務実習を経験させていただき、卒業研究でも素晴らしい指導者、同期、先輩後輩に恵まれて楽しい研究生生活を送ることができました。研究生生活の居心地がとても良かったのも、もう少し大学に残ってみたいと決めた理由の一つです。



留学中のアルバータ大学は1908年創立の州立総合大学で、薬学部は2014年に100周年を迎えた歴史ある学部です。エドモントンは車でカナディアンロッキーまで行ける素晴らしい立地にある自然豊かで穏やかな街です。冬の気温は -20°C 以下の日も多いですが晴天の日が続き、夏はFestival cityと呼ばれるほど毎週のようにどこかでFestivalがあり賑やかです。人口も多すぎず穏やかですし、カナダの中では税金も他の州に比べて安くて暮らしやすいです。

Dr. Seubert研究室では、多価不飽和脂肪酸からの代謝で生成される新規のエポキシ代謝産物の研究に焦点を当てており、ドコサヘキサエン酸 (DHA) のCYP由来の代謝物であるエポキシドコサペンタエン酸 (EDPs) という物質に着目して、心臓保護、虚血再灌流、ミトコンドリア、CYP450経路、細胞死のメカニズムなどの探索を行っています。私の研究としては、日本ではラット初代血管平滑筋細胞機能に及ぼす圧力ストレスの影響について、カナダでは主に心筋細胞の継代細胞培養を用いた実験および蛍光顕微鏡観察をメインに行っています。現在の

Dr. Seubert研究室はカナダ人のボス、ロシア人研究者、カナダ人とエジプト人の大学院生2人と私の5人体制です。研究室としては小規模ですが、オープンラボという研究室同士の壁や仕切りがなく、他の研究者との交流がある環境で、他研究室・企業とのコラボレーションも盛んです。また、学部間を超えてのセミナーや勉強会も頻繁に開催されています。

英語に関しては、日常会話と専門用語はやはり大きく異なり、仕事に馴染むのに苦労しましたが、どんなに理解するのに時間がかかっても、多くの人が嫌な顔をせず根気よく教えてくれますし、一生懸命やっていたら助けてくれます。国籍の異なる多くの大学院生・ポスドクの人に囲まれて研究ができる環境にいられるのはとても良い刺激になります。世界各地から来た移住者で構成され『モザイク』社会と呼ばれるカナダは、それぞれの文化を尊重し共存して成り立っているという事を日常から感じます。異国の地で1人で生活することは、予想できない出来事の連続ですが、とても良い経験をさせてもらっています。

学部生生活6年間は長いようでしたが、長期実務実習と卒業研究を経験し、双方で働く大変さ・面白さを知ることができ、本当に自分の関わりたいことへの選択肢が増えたと思います。薬学部を卒業して臨床で薬剤師として働く仲間がほとんどの中で、大学院に進学するケースは多くありませんでしたが、私らしい選択だと思っています。将来は北海道医療大学の薬学部で培った教養・経験・技術を基盤に、自分らしい道を歩みたいと思います。

在学生からのメッセージ

薬学部 5年 武田芙蓉さん

薬学部42期生の武田芙蓉です。今回このような機会をいただきましたので、少しでも在学生の日常をお話しさせていただこうと思います。



私は入学当初より、YOSAKOIソーラン祭り部「THE☆北海道医療大学」に所属しています。6

月に札幌各地で行われるYOSAKOIソーラン祭りや北竜町や三重県津市、福祉施設や各学会など様々な場所で演舞をさせていただいております。「一緒に感動、一緒に元気」のチームコンセプトのもと、総勢120人を超える部員で日々、切磋琢磨し活動をしています。練習は、朝は始発の当別からのワンマン電車に乗り、講義が終わると体育館や駐車場にて、

遅い時には終電まで行くこともあるほど時に過酷ではありますが、仲間と共に1つの作品を作りあげるにより、演舞を見て下さるお客さんからいただける笑顔や声援は言葉にならないほどの嬉しさであります。この部活は、在学生のみならず、薬学部のOB・OGのみなさんをはじめとする様々な方たちの大きな支えにより活動を続けることができています。この活動を通して、周りの方たちへの感謝、協力しあうことの重要性を改めて感じています。毎年新しい作品を作り上げていますので、是非一度、ご覧になっていただきたいなと思います。

また、私は本学の2013年度より導入された薬学教育・育成奨学生の一員として日々学生生活を行っています。この制度は、具体的には大学院に進学し、研究職や教員を目指す制度になっています。2年時より生命物理科学講座や薬理学講座、薬剤学講座など様々な講座を見学させていただきました。現在は、薬剤学講座にて研究結果に一喜一憂しながら研究を

進めております。研究を始めたころは、実験操作一つ一つが難しく苦戦しておりましたが、やっとなんとか実験ができるように慣れてきたところでありました。研究成果に行き詰ったときに先輩方の実験ノートや論文を開くと、新しい発見や自分の研究の反省点を見つめ直されると同時に、より一層の努力が必要だと奮い立たされます。

入学してから早や5年が経とうとしており、今年には実務実習も始まります。まだ実習がどのようなものか想像することが難しく不安ではありますが、実際に医療の現場で学ぶことで多くの知識や技術を身に着けたいと思うことはもちろん、自分の進むべき道を見極めるためにも実務実習がより有意義な時間になるよう精進したいと考えております。

最後になりますが、北海道医療大学薬学部同窓会がますます繁栄することを願ひまして、在学生の挨拶を終わらせていただきます。

第64回 北海道薬学大会で 本学同窓生2名が同時受賞

日本薬学会北海道支部第144回例会において同窓生2名が医療薬学貢献賞並びに日本薬学会北海道支部奨励賞を受賞しました。以下に表彰演題および各先生のコメントご紹介いたします。

【医療薬学貢献賞受賞】

実務部門

『保険薬局におけるCKD患者に対する取り組み』

まつもと薬局 大野 伴和 先生 (23期)

【日本薬学会北海道支部奨励賞受賞】

基礎薬学分野 (生物系)

『ビタミンB6欠乏症を引き起こす銀杏中毒に関する研究』

北海道医療大学薬学部 小林 大祐 先生 (23期)

大野 伴和 先生からのコメント

この度、日本薬学会北海道支部医療薬学貢献賞(実務分野)を受賞しました。ご推薦を頂きました北海道薬剤師会の竹内会長をはじめ、ご尽力いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。受賞講演は、CKDに関連した保険薬局の取り組みについてお話

をさせて頂きましたが、今回の受賞を励みとし、今後もCKDの分野に留まらず幅広い視野を持った薬剤師となり、その思いを地域の薬剤師に伝えていけるよう努力していきたいと思っております。

小林 大祐 先生からのコメント

この度、日本薬学会北海道支部奨励賞を受賞することができました。本研究は、和田啓爾先生が銀杏中毒の原因物質を発見して以来、現在まで続けてきた研究があつて初めてできた研究です。和田先生、吉村昭毅先生、石川美香先生をはじめ、薬学部衛生薬学講座(衛生化学)と一緒に研究をしてきた大学



院生、卒業生の皆様に感謝します。また、同期と同時期に受賞することができ、とても嬉しく思います。今後も、同窓生の皆様の力を借りながら、少しでも

現場で役立つ研究を学生と一緒に行っていきたいと思います。



左から小林先生、大野先生

2017年度オープンキャンパスのご案内

今年度も北海道医療大学オープンキャンパスが開催されます。

日時

6月18日(日)・8月5日(土)・8月6日(日)・9月16日(土)

※いずれの日程も11:00~16:00まで

内容

●大学概要説明

2017年度入試結果及び2018年度入試概要について説明を行います。

●学内施設見学

興味のある学部・学科に分かれて施設見学を行います。

●体験実習または模擬講義

興味のある学部・学科に分かれて行います。

●保護者ガイダンス

●個別進学相談

※ランチ付き

JR札幌駅より無料送迎バス運行

オープンキャンパスに関するお問い合わせは入試広報課まで

フリーダイヤル：0120-068-222

E-mail: nyushi@hoku-iryo-u.ac.jp

第9期生卒業30周年記念祝賀会

卒業30周年記念同窓会「9期の会」を終えて

金田 祥子 さん、高木 百江 さん

2016年7月17日（日）北海道医療大学薬学部第9期生の卒業30周年記念同窓会が、京王プラザホテル札幌で開催された。

30年ぶりにみんなに会う。胸が躍るようなドキドキと、何か分からない不安なドキドキが入り交じる。テーブル席は出席番号順ですぐみんなの顔がわかった。浜上君の挨拶に始まり、ウキウキした頃には遠慮がちな会話は消えていた。

當間君がカメラマンで、すごい量の写真を撮ってくれ同期にラインで写真を送ってくれてとても嬉しかった。ずっと会えなかった仲間と、今頑張っているインターネット研修の話など真剣に聞いてくれたこと深く感謝してる。

この数時間前、希望者が医療大学見学ツアーに参加した。浜上君が学校の中を案内してくれた。中央講義棟という新校舎。最新式エレベーターで10階のビューラウンジへ。カフェを備え、ガラス張りの展望は絵葉書のような美しい風景。なぜか、音別校のホワイエが頭に浮かんだ。講義室も机も

椅子もスタイリッシュなものに変わっていた。変わらない場所もあった。薬学部各教室と渡り廊下。そのまま置かれている長椅子に座ってみた。実験室は実験台もあのままで、横についている白い流し台は試薬の汚れもそのままで、その汚れが嬉しかった

「全国で仲間が頑張っているんだ。」って、会える機会があったからこそ実感がわいてきて嬉しい気持ちでいっぱいになった。スマホ時代になってラインを交換したり、盛り上がる皆にほろっとするくらい嬉しかったし感動した。

また今度、変わらぬ笑顔で集まろうね。楽しい時間ありがとうございました。



第1回 薬学部同窓会 「卒業生・在校生合同懇談会」の報告

薬学部同窓会主催の第1回 卒業生・在校生合同懇談会が札幌プリンスホテル国際館パミールにて平成29年4月21日（金）に開催されました。この会は、在校生と卒業生が交流することで、就職や実際の仕事に関する認識を深めるとともに、悩みや不安を話し、相談する機会を提供するという趣旨のもとに企画されました。学内からは就職委員会委員長の吉村昭毅教授にご臨席を賜り、在校生と卒業生の橋渡しをしていただきました。



当日は在校生（4～6年生）66名、卒業生39名、同窓会役員・学内職員18名、計123名の参加があり、交流を深めることができました。

田中稔泰 同窓会会長（3期）と吉村昭毅 教授のご挨拶に続き、多田正人 同窓会副会長（4期）の乾杯のご挨拶と共に合同懇談会が始まりました。卒業生のネームストラップの色を職種毎に変え、病院は赤色、薬局は青色、行政・企業は緑色とし、在校

生は希望職種の卒業生を囲み、積極的に情報収集をしていました。実際に現場で働いている先輩たちの生の声を聞くことができた当合同懇談会は、在校生にとって、有意義な場になったと思われます。そして最後は、桂正俊同窓会副会長（12期）によるご挨拶と中締めで盛会のうちにお開きとなりました。次年度も参加者にとって有意義な会になるように、理事会等で開催要綱が検討される予定です。



北海道医療大学 同窓会☆コラボ講演会 第10弾について

平成29年3月11日（土）に北海道医療大学 同窓会☆コラボ講演会 第10弾が開催されました。本年度は、日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック院長 菊谷武先生に、「地域で“食べる”を支えるという



ことー専門職が果たす役割ー」と題し、ご講演いただきました。地域に求められる食べることへの支援体制や各職種の役割について、実践例を交え詳細にお話しいただきました。ご講演内容の一部には薬の服用に関わる部分もあり、また第二部の後半では活発な質疑応答が行われるなど、大変勉強になる時間でした。今回の参加者は200名を超え、薬剤師、歯科医師、歯科衛生士、看護師、言語聴覚士など、様々な職種の方にご来場いただきました。

本講演会は、「口から食べられる理想に向かって」をテーマに、本学の生涯学習事業の一講座として毎年開催されてきました。企画運営は、これまで歯学部・歯科衛生士専門学校・言語聴覚療学科・看護学科・福祉学科の各同窓会が合同で行っており、平成27年度より北医療薬もこれに参画いたしました。次回は、平成30年3月に開催を予定しております。多数のご参加をお待ちしております（北海道医療大学 同窓会コラボ講演会ホームページ <http://hokuiryoudaidousou.jimdo.com/>）。



第38回 北医療薬 総会および懇親会のご案内 (医療薬学セミナーのご案内)

第38回 北医療薬 総会および懇親会を下記のとおり開催いたします。総会は同窓会発展のために皆様からのご意見を頂戴し、活動方針について審議いただく貴重な機会です。多くの皆様にご参加いただき、ご意見を賜りながら、親睦を深めていただきたく思います。是非、お誘い合わせのうえ奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

総会終了後、小田 和明 先生を講師に迎え医療薬学セミナー（札幌支部主催）を開催いたします。

記

日 時：平成29年7月29日（土）

【北医療薬 総会】 16時00分

【札幌支部 総会】 17時00分（札幌支部会員）

【医療薬学セミナー】 17時30分

北海道医療大学 特任教授 小田 和明 先生

「CYP（P450）を阻害して薬理活性を発現する薬物の創製～43年目の歩み」

*札幌支部主催ですが、どなたでもご参加いただけます。

*北海道医療大学薬剤師支援センター認定研修（1単位）です。

【懇親会】 19時00分（セミナー終了後）

会 費：3,000円（当日申し受けます）

会 場：ホテルノースシティー

札幌市中央区南9条西1丁目 TEL (011) 512-9748

*出欠席のご回答は、[同窓会ホームページ](#)（北海道医療大学 → 薬学部 → 同窓会）で7月20日までにお知らせください。

同窓会ホームページ：<http://www.hoku-iryo-u.ac.jp/~phalumni/>

※はがきでの受付は行いません。

お問い合わせ：dosoyaku@hoku-iryo-u.ac.jp

編集後記

今年も北海道は『よさこいソーラン祭り』の季節がやってきました。いまや全国から参加チームが集い、観客の規模も『札幌雪まつり』をしのぐほどです。本学学生も上位入賞を目指し(?)日々練習に励んでいます。本番でも若々しくエネルギッシュな踊りを披露してくれることでしょう。この会報が届くころには結果がでていますが、さて、結果はいかに？
(S.K.)